

でんでら通信 第百十一号 令和五年八月

八月二十三日（水）施餓鬼供養会

本年より通常どおりの供養会とさせていただきます。す。

なお、準備の都合上、前日までにお志をあげていただきますようお願いいたします。

十時より山門、新亡施餓鬼供養会

今年初盆を迎えられたお家の方は、準備の都合上、おまいり人数をご連絡ください。

また当日までに白木のお位牌をお持ちください。

十一時より檀信徒施餓鬼供養会

古い旗、塔婆は本堂の箱にお入れください。当日供養し、新しい旗、塔婆をお渡しします。

坐禅会

八月三十一日（木）十時に坐禅会を開催します。みなさんのご参加をお待ちしております。

心頭滅却すれば火もまた涼し

暑中お見舞い申し上げます。

あつついすねえ。今年の夏も猛暑、猛暑でげんなりです。こうも毎年世界的な暑さが続くと、地球

環境規模で何か異常事態が起きているのではないかと、心配になります。

さてこんな暑さの中、むかし「熱い」という心情を表したことばが、ご存じ「心頭滅却すれば火もまた涼し」です。

どんな困難や苦難も、それを超越した境地に至れば、苦痛と感じなくなるというものです。

もともとの出典は、中国の唐の時代の詩人 杜荀鶴（と じゅんかく）が『夏日悟空上人の院に題す』という詩の中に「安禅必ずしも山水を須いず、心中を滅し得れば自ら涼し（安らかに座禅をくむには、必ずしも山水を必要とするわけではない。心の中から雑念を取りされば火さえも涼しく感じるものだ）としています。

1582年に、織田信長は甲州征伐として甲斐の国（現在の塩山市）恵林寺に攻め込みました。

恵林寺には武田家の武将の一人・佐々木義弼のほか、三井寺の上福院、足利義昭の家臣の大和淡路守たち一行を匿（かくま）っていました。当時、寺は聖域とされており、いくら敵が匿われているからといって、そこを攻めるなど禁忌破りもいところでした。それでも織田軍は寺の周囲に薪を積み、焼き討ちを仕掛けました。

追い詰められた百人もの修行僧たち。彼らは慌てふためき右往左往します。しかしそんな彼らの狼狽ぶりをよそに、快川和尚は火炎の中で座禅を組んで

「この機に臨んでどう法輪を転ずるか、一句言つてみよ」と修行僧に投げかけます。禅僧として何か気

の利いたことを言ってみる、という感じでしょうか。弟子たちはそれに応えそれぞれ句を唱えました。そしていよいよ炎が迫る中で、快川和尚が、

「安禅不必須山水 滅却心頭火自涼」

（安禅必ずしも山水を須ひず 心頭滅却せば

火も自づから涼し）

の辞世の句（亡くなる最後に唱える句）を残したといわれています。

「心頭」とは、心のこと。

「滅却」とは、消し去ること。

無念無想の境地に至れば、火さえも涼しく感じられるということから、どんな苦痛であっても、心の持ち方次第でのげるといえるのです。

苦しみは、心がそう感じることによって心に起こるものです。いかなる苦しみも、それを感じているのはあくまでも心なのです。

昔は三〇度を少し超える気温が、夏の気温でした。それが今の時期は三十五度が一日の最高気温となり三十二、三度となると、涼しく思える気温となっています。心がそう感じているのです。

心の持ち方ひとつで、喜怒哀楽はいかようにもとらえられるのです。

それならば、心を定めることによって人は苦しみから離れることができるのではないか。これが禅の思想の根本なのです。

とはいっても暑い！早く秋が来ないかなあ、とつくづく思う今日このごろです。